教員評価と機関リポジトリの相互作用

高知工科大学附属情報図書館
篠森敬三・北村多樹子

導入

- 大学と機関リポジトリ
  - リポジトリとコンテンツ供給者としての教員（研究者）との関係を検討
    - 上位概念としての機関リポジトリの役割は置いといて・・
    - 大学図書館員：教員とリポジトリの関係でおそらく最大の接触相手
- リポジトリの振興はコンテンツ蓄積に依存
  - どのようにコンテンツの蓄積を形成するか？
    - 他の問題は後でもよい・・
- リポジトリのコンテンツ蓄積のための方策
  - コンテンツ蓄積のために何をするのがよい？
  - コンテンツ蓄積のために何が使える？

結論から：教員評価と機関リポジトリとの相互作用が影響

背景　～大学におけるリポジトリ推進の悩み～

- リポジトリへの学内コンテンツ集積の困難さ
  - 学内コンテンツがなかなか集まらない（本学導入時など）
- リポジトリ掲載用論文原稿提出依頼の行方
  - 教員側の消極的協力という社会的環境
  - 著作権の制約＝著者最終稿の掲載となる場合が多い
  - ⇒学術雑誌掲載論文のリポジトリ用原稿未提出
- リポジトリに対する無関心
  - 学内コンテンツの集積が不十分
  - ユーザ利用度（閲覧＆登録）の伸び悩み
  - ⇒悪循環

何とかできないか？？

コンテンツ集積のためのよくある方策

- 検討した対策⇒論文原稿提出のルール化
  - ルール化することで半ば強制にしたい・・
- しかしコンテンツは依然として集積しないことを予想
  - 実際の成果物に比べて少ない数が集まる
  - 紙の論文別刷や学術雑誌提供PDFファイルが提出される
- 予想の根拠は？
  - 教員側の意識を推論（次のスライド）
- つまり教員側利益との対立点がある
  - **頑張ってまでは提出しない**ということ

何故教員側が消極的なのか？

- 教員側の意識を解析
  - 論理分析による（質問紙法ではない）
- 教員側意識＝自分の業績を広めることが目的（タイプ1）
  - 優れた業績を広報したい
    - 自分が満足している研究のみを広めたいので，代表作のみ提出
    - 学生に学位を出すためにやむを得ず出した論文には興味がない
  - 広く読まれることが望ましい
    - 論文掲載誌提供PDFの方が美しく読みやすい
    - 著者原稿は読みにくい
  - できるだけ簡単に実施したい
    - 論文掲載誌提供のPDFファイルで提出すれば楽で正確
    - 著者最終稿は小さなミスが残っているかもしれない。

教員側の理解が必要

- 教員側の意識（まとめ）
  - 学術雑誌作成PDFをメールで回すぐらいならしてもよい。
  - それ以上の労力が必要ならば，リポジトリではなく，学術雑誌側から直に閲覧・取得（Download）してもらったので十分
  - ⇒機関リポジトリへの理解は十分とはいえない
- 機関リポジトリのメリットに対する理解
  - 自分のメリットに気づいていない
  - 大学（大学＆大学図書館）のメリットを気にしていない
  - 研究者個人の利益＋大学の利益（＝大学が行う社会貢献の利益）への理解が必要

ではどうやって？

大学におけるリポジトリの利益とは？

- リポジトリにコンテンツを蓄積すれば・・
  - 教員側にささやく機関リポジトリの利益　による誘導
- 検索エンジンから検索を受け，誰でも無料で閲覧できる
  - その分野の教育研究機関所属メンバに限定されない
  - より広範な公開になる
- 他の教員の成果物も一覧で見ることができる
  - 実のところ，他研究分野の専門誌を見ることは少ない
  - 学内の共同研究にも役立つ
- 紀要論文の閲覧が容易
  - 分野が広範な為で冊子体を常時見る人は多くはない

研究者個人＋社会貢献を行う大学　の利益へ！

リポジトリは立ち上げが大変なだけ

- リポジトリにコンテンツが蓄積すれば・・
  - その大学のコンテンツの利用度が高くなれば関心も高まる
  - 大学からみた公開の意義が増大する
- リポジトリは立ち上げが大変なだけ
  - 立ち上がれば振興する
- 最初頑張れば大学でリポジトリはどんどん発展

大学におけるリポジトリの利益とは？（その２）

- 機関リポジトリにコンテンツを網羅的に蓄積すれば・・
  - 教員側に言いたくない（？）リポジトリの利益（本学の例）
- 博士論文はリポジトリでいつでも閲覧可能
  - 各教員研究室の教育水準が把握できる
    - 全学生・院生について網羅的に学位の水準を把握できる
    - （本学では修士論文・卒業研究論文（一部）も図書館HPで公開）
- メジャーじゃない雑誌に出ているという論文を閲覧できる
  - 教員の研究レベルが把握できる
    - 図書館では全ての電子ジャーナルを購読できない
- ⇒教員（含所属学生）の研究・教育業績を正確に掌握
  - リポジトリであることで一覧性，網羅性，迅速性を確保（さらに無料）

教員評価と機関リポジトリの相互作用

- 教員評価
  - 授業評価＋業績評価＋社会貢献への評価
- 評価のためのデータが必要
  - 授業評価は学生への質問紙法（アンケート）
  - 加えてリポジトリのコンテンツ
    - 自らの研究業績＋教育業績（授業を除く）のリストと等価（さらに中身付）

何故教員が消極的なのか？・・・真実編

- 間接的な教員評価を避けたい
  - 他の教員にも職員にも学生にも業績（＝実力）が明らかに
    - 学者なだけに書き物（論文など）で決まる
- 結局，教員の意欲によって行動が規定される
  - 教育研究業績に自信がある教員は基本，積極的に（タイプ１）
  - 教育研究業績の無い教員はもっと消極的に（タイプ２）
    - これはこれでみっともない

次の一手　～どうするこの相互作用～

- １　リポジトリが教員評価となることを回避できないか？
- ２　積極的な教員のみで実施
- ３　要は教員評価を受け入れるかどうか

ちょっと珍しい高知工科大学の事例

- 外部非公開教員評価（給与連動型）が先，リポジトリが後
  - 内部的に教員評価に使われるのなら良いが学外公開は嫌　から
    - 普通の大学は逆だと思います
- １　リポジトリが外部教員評価となることを回避できないか？
  - 公立大学法人として回避しない（外部から見える必要）
- ２　積極的な勝ち組教員のみで実施
  - 当初はリポジトリへの提出は任意
- ３　要は教員評価を利用する~~受け入れる~~かどうか

高知工科大学学術情報リポジトリ（事例報告）

- 事前の状況（導入の下地（コンテンツ収集）はできていた）
  - 学位論文、紀要→電子化及び公開は、ウェブ上ですでに実施
  - 雑誌掲載論文等→教員評価システムでの蓄積あり
- 経緯
  - 2006年 5月　作業部会設置
  - 7月　平成18年度次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業　採択
  - 2007年 5月　テストサーバ設置
    9月　試験公開（学内限定）
    10月　一般公開
    11月　運用指針施行
- システム
  - ネットワーク運用センターによる自力構築。運用も担当
  - Dspace1.4.2
    - 北村多樹子「機関リポジトリへの取り組み－高知工科大学学術情報リポジトリ構築－」2007 http://hdl.handle.net/10173/334

考察：機関リポジトリ推進の難しさとは

- １　リポジトリ推進は教員評価推進と同じ
  - 教員評価反対への対応は、図書館の問題？図書館の仕事？

- ２　評価されたい教員と評価されたくない教員
  - 評価されたい教員（タイプ１）は利便性追求型の要請
    - 著作権問題は図書館で解決を！
    - 学術雑誌提供PDFをリポジトリへ！
  - 評価されたくない教員（タイプ２）は藪の中へ
    - リポジトリへの論文提供は任意であるべし！

考察：機関リポジトリ推進の難しさとは

- ３　リポジトリは単純な業績評価主義への批判を乗り越えられるか
  - 本学では乗り越えるのではなく逆に単純な業績評価に活路を見いだした・・・
  - リポジトリでは中身も簡単に見ることが出来る
  - 研究以外（教育・地域貢献）の成果をどのように評価するのか？

まとめ

- 教員評価と機関リポジトリとの間には相互作用
  - 機関リポジトリは間接的な教員評価の機能がある
  - 教員へのサービスとみなされないかもしれない
- 相互作用がうまく回避できないとリポジトリが進展しない
  - 半強制的なルールでもコンテンツが集まらない
  - 無理にコンテンツを集めると大変なことに！？
- 技術的手法
  - 積極的な教員のみで実施
- 理念として積極的に教員評価を受け入れればリポジトリは推進される
  - リポジトリで公開する成果物のみが結局、直接的あるいは間接的な教員評価対象に

ご清聴有り難うございました